

デカルト＝ベークマン往復書簡考・下

Correspondence between Descartes and Beeckman · II

山田 弘明
Hiroaki YAMADA

(要旨)

本稿はデカルトとベークマンの往復書簡(1630-34年)への翻訳・注解である。その解題として、この時期の二人の状況、関連年表、書簡の内容とその解釈を記した。すなわち、1630年の2通には、デカルトの『音楽提要』は自分の教示によるものとベークマンが自慢したことに対して、前者の激しい批判が展開されている。だが、かりに後者が本当に自慢したとしても、公平に見てデカルトがベークマンに負うところは大きい。デカルトは誇り高い人であったにせよ、先学に対して節度を越えた言いすぎがあったとしなければならぬ、と解した。

(Abstract)

This is a Japanese translation and commentary of the Latin letters between Descartes and Beeckman written in 1630 & 1634. In two letters in 1630, Descartes criticized Beeckman vehemently, because the latter seemed to have boasted of teaching young Descartes to write the *Compendium Musicae*. But even if it may be true, Descartes' debt to Beeckman was too great to justify such an outrageous reaction.

キーワード：デカルト、ベークマン、激越な批判、『音楽提要』

Descartes, Beeckman, Vehement criticism, *Compendium Musicae*,

はじめに

デカルトとベークマンとの間には全部で9通余の書簡が存在する。前稿「デカルト＝ベークマン往復書簡考・上」では、1619年代の6書簡を取り上げた(書簡1～6)。本稿では1630-34年のデカルト書簡3通とベークマン書簡の断片¹を取り上げ(書簡7～9)、その邦訳と注解を試みる。ここでは解題として、(1)この時期の二人の状況、(2)関連年表、(3)書簡の内容とその解釈、を記しておく。

(1) この時期の二人の状況。

1630年前後、この二人はどこでなにをしていたであろうか。ベークマンは1619年デカルトと別れたのち、

結婚してユトレヒトおよびロッテルダムで教職に就いている。そして1627年以来ドルトレヒト学院院長²の職を得て、死にいたるまでの10年間そこに留まることになる。かれはそこで「数学的自然学の哲学」の授業を担当していたという。1628年10月、9年ぶりに訪ねてきたデカルトと共同研究をした。ベークマンは多くの点でデカルトを高く評価していたのだが、「弟子」(書簡8.AT. I, 157)としてやや見下していたことも否定できない。また、かれは1629年3月から共通の友人リヴェ(レイデンの神学者)を介して、メルセンヌ³やガッサンディとも文通を始め、1630年8月ドルトレヒトにメルセンヌの訪問を受けている。かれの『日記』から、この時期ベークマンの関心は、数学、音楽をはじめ、

力学、運動論、ガリレイ研究など、自然科学の全般にわたっていたことが分かる。それらをまとめた『数学＝自然学…』⁴は死後に出版されることになる。

他方、デカルトは1619年ブレダをあとにして軍人としてドイツに行き、そこで哲学者になる決心をした。そして1620年以降は軍隊を辞め、新学問の準備をするべくドイツ、イタリアなどヨーロッパ各地を遍歴した。そして、1628年10月8日ドルトレヒトにベークマンを訪ねた。9年間の空白があったが、両者ともに再会を喜び、共同研究をした。その後の足取りは定かではなく、1629年4月26日フラネケル大学に登録するまでの間の消息については諸説ある⁵。そのなかで近年K・ファン・ベルケル⁶が『ベークマンの日記』を踏まえた新説を出しているのが注目される。すなわち、デカルトは1628年11月までにパリに帰り、その冬を北フランスの田舎で過ごしてオランダに転住する準備をした（これはバイエの伝記⁷とも一致する）。1629年3月28日、オランダに向かう途上で再度ベークマンを訪問してしばらく留まった⁸。しかるのち、アムステルダムを経由して4月にフラネケル⁹に定住した。大学に登録して図書館を利用しつつ形而上学を書いた。したがって形而上学に集中した「最初の9ヶ月間」とは1629年4月から12月までとなる。この説は推測に基づいている部分があるとはいえ、流れとしては自然だと思われる。1630年以降のデカルトは在アムステルダムおよびレイデン（1630年6月27日、レイデン大学に数学の学生として登録）である。メルセンヌ宛てなどの書簡から分かるように、この時期のデカルトの仕事ぶりはエンジン全開の状態である。『形而上学の小論文』をまとめ、永遠真理創造説を明らかにした。そのほか、音響学、幾何学、力学、光学、機械学、化学、解剖学など、多くの自然科学上の主題を体系的に扱った。『世界論』はこの頃書かれた。

（2）関連年表.

この時期の二人の状況の概要は以上の通りである。だが、1630-34年の書簡が書かれた背景には、デカルト・ベークマン・メルセンヌの複雑な交友関係がある。その事実関係をさらに資料的に詳しく調べ、年表の形にまとめると次のようになる¹⁰。

1628.10.8. デカルトはドルトレヒトにベークマンを訪ねて共同研究をする。その内容は代数学と幾何学（光線の屈折角度、楕円、放物線など）である。デカルトはパリから『代数学』を送ると約束し、

それは1629年1月に届けられた。その時の研究成果の一部はベークマンの『日記』1628-29年に掲載されている（AT. X ,331-348）。デカルトは自分の『代数学』が幾何学の完全な知識に達しているだけでなく、「すべての人間的知識を含む」（AT. X ,331-332）と言っている。かれの視線は、数学を超えて全学問に及んでいたものであり、この点にベークマンとの差異が認められるであろう。デカルトはもはや1619年の青年将校ではなく、諸国を遍歴して新しい学問の構想を温めていた哲学者であった。すでに『精神指導の規則』は書かれている。

1629.3 中旬¹¹ ベークマンはメルセンヌと文通をはじめめる。かれはデカルトの才能をたたえたあとで、「10年前、協和音の快さの原因について私が書いたものを分け与えた（伝えた）communicaviのは、まさにその人に対してです」（Beeckman à Mersenne. *Correspondance du P.Marin Mersenne*. II , 218,AT. I ,30）と書く。自分が『音楽提要』の原案をデカルトに与えたとの自負が読み取れる。ここに事の発端がある。

1629.3.28. デカルトはオランダに向かう途上ベークマンを再訪。しばらくドルトレヒトにとどまって共同研究をする。

1629.6.18. 在フラネケルのデカルトは、フェリエに宛てて、旅の途上で道案内や旅銀などで困ったときにはベークマンに助力を仰ぐようにと書く（Descartes à Ferrier.AT. I ,14-15）。それはこの時期の二人が緊密に連絡し合っていたことを物語る。

1629.10.8. デカルトはメルセンヌに「私の友人 [ベークマン] の忘恩をお知らせくださり、まことにありがとうございました。…かれが10年前に私の師 mon maître であったと書いているなら…それは大間違いと言うものです」（Descartes à Mersenne.AT. I ,24）と書く。忘恩とは明らかに1629年3月中旬の書簡を踏まえている。この時点でデカルトは一転してベークマンに不信の念をいだいている。

1629.12.18. デカルトはベークマンの運動論や音楽論を批評したあとで、メルセンヌに「他人の筆になるものをわけもなく自慢しないようかれ [ベークマン] にお願ひする」（Descartes à Mersenne.AT. I ,94）ことを求めている。そして「11年間ベークマンの手元にあった小論 [音楽提要] の原本を

一ヵ月前に取り返しました。それだけの時間で十分時効になるなら、かれはそれを自分のものとする権利を持つことでしょう」（同 AT. I ,100）と揶揄している。『音楽提要』の返還については書簡7とも符号する。バークマンがそれをデカルトに教えたかのように語っていることへの抗議である。

1630.1. デカルトはメルセンヌに宛ててバークマンを批判している。「この人は音楽について素晴らしいことを書いたと自負していますが、それについてはルフェーブル・デターブルから学んだことしか知らないのです。…かれには私の発見への感謝の念がほとんどなく…それゆえ私はもはやかれとは交渉をもっておりません」（Descartes à Mersenne.AT. I ,110-111）。

1630.8. メルセンヌはアムステルダムあるいはレイデンにデカルトを訪問。同時にドルトレヒトにバークマンを訪ね、かれの『日記』を読みつつデカルトの音楽論を論じる。K. ファン・ベルケルの考証¹²によれば、それを讀んだメルセンヌは、直ちにバークマンの独創性を認識した¹³。そして、デカルトが「忘恩」の人と絶交しようしていることを伝えた。バークマンは驚き、すぐに手紙を書いて説明を求めた。メルセンヌも同じことをしたという¹⁴。この考証は資料的な裏づけをやや欠くものの、十分ありえることであろう。もしそうなら、自らの手で二人の不和に火をつけたメルセンヌは、こんどは火消しに懸命となっていたことになる。

1630.9.10 書簡7. これはバークマンの手紙への返信になっている。冒頭に記されているように、デカルトはあまり返信する気はなかったのだが、ドルトレヒトの院長補佐からの要請もあり、筆を執った。1年余の沈黙を破って、バークマンへの鬱積した批判を吐露している。

1630.10. 前半 書簡7 bis. この断片はデカルトによる引用として伝えられているものである。その執筆時期についてはC・デ・ワールトの考証による。数行にすぎない文章だが、この時期のバークマンの書簡のうち唯一残されたものであり、書簡7と8とを結ぶ貴重な文献であろう。書簡7への返信の一部と推測される。

1630.10.17 書簡8. おそらくバークマンのこの返信が引き金になって、デカルトの怒りが爆発してい

る。書簡7よりもさらに激越な調子になっている。

1630.11.4. デカルトは「バークマンが私に書いたことをあなた〔メルセンヌ〕に報告したことで、かれ〔バークマン〕は私を叱責しました。そこにおいて、かれはなかでも次のように書いています」と言って、上述の書簡7 bisを引用している。そして、それゆえに書簡8のようなことを書いたのだとして、冒頭の数行（「メルセンヌ神父があなたについてなにかを私に報告したのではないかと疑っておられるなら…」）を引用している。最後に、「私は長い論をなしましたが、そこで私が言いたかったのは、かれが最近書いた数通の手紙の無作法さだけです。私はそれを、私がなした第2の答弁とともに保存しておきます。なぜなら、もしいつか私が道徳について書くことがあり、そして学識をてらう人の虚栄がいかにバカげているかを説明したいと思ったなら、これら4通の手紙を提出することほど道徳をよく描くことはないでしょう」（Descartes à Mersenne.AT. I ,171-172）としている。これは書簡8への説明になっている。「第2の答弁」、「4通の手紙」が示すように、この件で二人は4～6通の書簡のやり取りをしていたことが分かる。残された書簡7・7 bis・8はその一部にすぎない。

1630.11.25. デカルトはメルセンヌに宛てて「保証いたしますが、私は氏〔バークマン〕に対して、あなたが氏のことを私に話したと証言したところではありません。反対に、私はそのことから氏の疑いをすべて取り除こうとしたのです…」（AT. I ,177）と書く。デカルトとバークマンの間にメルセンヌが介在したことで伝聞が混じり、話が複雑になっている。

1630.12.23. 「私がバークマン氏に対していかにして自分を抑制したかを、あなた〔メルセンヌ〕はお気づきだったことでしょう。かれ自身の複数の手紙が私にその正当な機会を与えるまでは、私はかれにいかなる〔友情の〕冷却をも示しませんでした」（Descartes à Mersenne. AT. I ,193）。

1631 夏 バイエによれば、デカルトはデンマークからアムステルダムへの帰路、「老齢と病気で死に脅かされているように思われた旧友バークマンをドルトレヒトに訪ねた」（AT. I ,209-210）という。ただ、かれがドルトレヒトを通ったのは確かであるが（Descartes à Villebressieu.AT. I ,215）見舞

をした証拠はないし、またバークマンは43歳で老齢とは言えない。次の書簡が示すように、その後病気になったのは逆にデカルトの方である。しかし、デ・ワールトも根拠は示さないが1631年8月頃には二人の和解があったとしている (*Journal de Beekman*, III, 211.note)。いずれにせよこの夏に、メルセンヌあるいはバークマンの補佐¹⁵が仲介に入るなりして、なんらかの関係修復が成立していたはずである。

1631.10.7. 1年間の空白ののち、バークマンはアムステルダムにデカルトを訪問し、何日かをともにすごした。「私 [バークマン] は、数日の間病気であったデカルトとアムステルダムで昼食をともにしました。かれはかなりの重病から回復していました」 (*Beekman à Mersenne*, *Journal de Beekman*, IV, 207.AT. I, 231)。その後、デカルトは返礼にドルトレヒトに行った可能性がある¹⁶。

1634.8.14. デカルトは言っている。「バークマン氏が土曜日の夕方にこちら [アムステルダム] に来られ、ガリレイの書¹⁷を貸してくれました。しかし、今朝それをドルトレヒトへ持ち帰りましたので、30時間しか手元に置けませんでした」 (*Descartes à Mersenne*.AT. I, 303)。そして、全体をざっと見ただけだが、その運動論はよいのだが既存の説にしたがっている点で欠陥があるとも言い、物体の落下、地球の運動などについて簡単なコメントを付けている (同305)。バークマンは、わざわざ書物を持参して貸してくれるほどの友情を示している。

1634.8.22 書簡9. 一転して学問的な内容になっており、光の伝播に関してバークマン説を批判的に検討している。一週間前の8月13日 (土)・14日 (日) の2日間、二人はこの問題をめぐって議論していたことが分かる。

1637.5.25. デカルトは、「私に好意をもっていないことが、しかも偽りの旗印で何がしかの評判を手に入れようと努めていることが分かっている人たち」のなかにバークマンを数えている (*Descartes à Mersenne*.AT. I, 375)。5年前に和解があり、共同研究を再開していたにもかかわらず、デカルトはまだ不信をつのらせている。このときデカルトはかれの死 (1637.5.20) をまだ知らない。

1637.6.14. デカルトはバークマンの死に哀悼の意を表すが (*Descartes à Colvius*.AT. I, 379-380)、

その調子は冷やかかである。

1638.10.11. 「私 [デカルト] は小論 [音楽提要] をバークマン氏に与えましたが、ご存じのように氏はそれを誇示して、あちこちで自分のものと吹聴しました」 (*Descartes à Mersenne*.AT. II, 389)。死して後まで批判は止んでいない。

(3) 書簡の内容とその解釈。

書簡7では、バークマンに対する抗議がはじめて明らかにされている。すなわち、かれは空しい虚栄を求めている。私はアリやウジ虫からも教わるのであるから、かれが他人にもものを教えたと自慢するのは要するに厭わしいことである。それを公言することは名声を損なうだろう。しかし単なる誤りとして水に流そう、と書いている。簡潔だがデカルトの主張はすべてここに出ている。根拠もなしにものを教えたと自慢する態度が気に入らないのである。しかし、バークマンはそれに反論したらしく、そこから話がこじれてくるのである。

書簡7 bis はバークマンの反論の一部であり、その内容の全体は、デカルトがバークマンとの対話から得たものの要約¹⁸であった可能性がある。バークマンはおそらく怒りを抑えて事実関係だけを示したつもりだが、『音楽論』などいくつかの業績はあくまでも自分に属するとするその態度に、デカルトは怒り心頭に発したものと思われる。

書簡8は、さらに一步踏み込んで渾身の批判を浴びせている。その言い分を要約すると次のようになる。「あなたが私を弟子扱いし、教えたと自慢するのは悪意のある策略である。それは病気のせいなのでその処方箋を書こう。学問には、歴史や幾何学のように教えられるものと、哲学のようにすぐには教えられないものがあるが、後者については根拠や権威なしには学ぶことができない。知識は共有のものであって、土地の所有のように自他を区別すべきではない。書いたものの原本を保持しようとするのも不合理である。発見には三種類ある。理性によって見出されたもの、幸運によるもの、発見者だけが価値を認めているもの、である。称賛に値するのは第一種だけであり、あなたのものは第三種に近い。あなたは双曲線や円錐曲線に無知であり、私のすすめによって証明できるようになったのに、あなたを師と呼べというのか。あなたが人から褒められたいなら、それに値することをすべきである。あなたの誤りを知らせることがあなたの利益に

なると思つて、この手紙を書いた」。この書簡は、他人を非難するときデカルトの舌鋒がここまで鋭く過激になることの良い見本である。論敵の一番痛いところを容赦なく攻撃する論法は、かれが受けたイエズス会の教育（討論 *disputatio*）のせいかも知れない。だが、形式的な面だけでなく内容的にも示唆に富む思想のいくつかが現れている。上の要約以外のことも含めて列挙しておく、病気の治療（セラピー）という発想、哲学を教えたり学んだりすることはいかにして可能か（根拠や権威が必要）、人は他人から学ばなくても同じことを知ることができる、知的財産は共有である、理性に導かれた精神（*ingenium*）のみによってものごとを考え出す、同じ水でも源泉から飲むのと水がめから飲むのとでは味が違う、ものごとは他の場所よりもそれが生まれた場所に置く方がよい、私は名誉よりも静謐で清らかな閑暇を好む、天使にはなれないことがあっても神にはない、などである。

書簡9は光の伝播が主題である。ベークマンは光の伝播には時間的な隔りがあるとするが、デカルトはそれが瞬間的だと主張する。そして、「松明を手で動かす方が、遠くの鏡に映ったその像よりも先に感覚される」という実験の妥当性をめぐって、二人がアムステルダムで共同研究をしたときの議論の整理がなされる。その例として、後半では太陽・月・地球の位置関係と食の見え方の相違が論じられている。これは光についての学問的な論争であり、書簡7・8とは次元が異なる。先述したガリレイの『天文対話』「第一日」には、太陽・月・地球の朔と衝、食、光などが話題になっており、それを意識してこの書簡が草された可能性がある。ロディス＝レヴィスは文中の一節（光の瞬間的伝播は私にはきわめて確かであったので、それが誤りであると証明されうるなら、私は哲学においてまったくなにも知らないと告白する用意があるほどだ）を取り上げ、これは「かれが間違っている場合でも、自分の独断的見解に対する自信を示している、ほとんどすべての人は遺憾に思うだろう」¹⁹としているが、そうではないだろう。これは「[もしそれが瞬間的伝播だとするなら] 自分の全哲学が誤りと思うだろうと告白するほどである」と言うベークマンに合わせたレトリックにすぎない。

これらの書簡をどう解釈すべきか。断片的な書簡7 bisと学問的な書簡9はさておき、過激な非難に終始している書簡7・8をどう見ればよいであろうか。な

ぜデカルトは、とりわけベークマンからなにかを教わったという点について過剰とも言える反応を示したのであるか。それについては人格の衝突、父親殺しなどの心理的な説明が一般的であるが²⁰、近年K. ファン・ベルケルはユニークな新解釈を提出している。すなわち、執筆中の『世界論』の独創性がベークマンによって侵されることを恐れていたデカルトは、かれを一喝して『日記』の出版をとりやめさせようと思図し、実際それに成功した、としている²¹。うがった見方ではあるが、デカルトにその危惧や意図があったことを示す史料的な根拠が十分ではないと思われる。

筆者としては、次のように考えておきたい。他人によるのではなく「自分で自分自身を導くこと」（『方法序説』AT. VI, 16）を使命としてきた哲学者には高い誇りがあり、それが少しでも傷つけられることには我慢がならなかったはずである。ベークマンが自分（デカルト）になにかを教えた友人たちの前で自慢したことは、自らの哲学的営為の沽券にかかわることであり、重大な屈辱であったであろう。しかも青年時代にベークマンを敬愛していただけに、それを裏切りと感じ、憎悪が増幅した結果この過剰反応となったと考えられる。ただ、哲学者の誇りがその原因であるということを実証するのは難しい。デカルトは多くの個所で自分が謙遜であることを示唆しているが、逆のことをテキスト的に示すことは容易ではないからである。しかし、一か所「誇り」（自負）²²の意味について説明しているくんだり参考にならう。「私はまた、私がそのいくつかの意見の第一発見者であると誇っている（*se vanter*）のではない。その意見を私が受け入れたのは、他の人によって言われていたからでも、言われなかったからでもなく、ただ理性が私にそれを説得したから、ということを誇っているのである」（『方法序説』AT. VI, 77）。すなわち、それは単に自分は偉いという誇りではなく、理性にしたがって真理探究している（それゆえ自分の考えには間違いがない）という自負である。これがデカルトの誇りである。そこには、理性の教えにしたがうかぎり、だれであろうがみな同じことを発見するはずであり、知的財産の私的所有権はないという基本的発想²³がある。したがって、学問上の発見は他人から教えられたり、とやかく言われたりする筋合いのものではないことになる。これは、書簡8の弁明「私がすぐに信じたのはあなた[ベークマン]から学んだからではなく、以前に同じことをすでに考えていたからだ」（AT. I, 159）とも基本的に一

致する。

これに対して、ベークマンの側からは当然反発があったであろう。かれは『音楽提要』がデカルトの著作であることは認めるが、そのアイディアは自らが提起したものだと考えている。それを受け取ったとき「私のアイディアはかれ〔デカルト〕の気に入ったようである」と『日記』に書いている(ATX,62)。それを教えたか否かの事実関係は不透明かもしれないが、ベークマンが青年デカルトに数学的自然学の考え方を教えたこと²⁴、そして後者が先学の人ベークマンに期待するところ大きかったことは否定できない。ベークマンも、共同研究の結果をデカルトの名入りで『日記』に記すなど、かれを高く評価していたことは疑いない。にもかかわらずデカルトを若い弟子として遇したのは、学問観を異にする年長者ベークマンにとっては自然なことであらう。「弟子」からの思いがけない批判が悩みの種だったとバイエは言うが²⁵、かれはおそらくその全文を読む気にも、反論の筆を執る気にもならなかっただろう(それゆえ補佐に代筆させられたと思われる)。残された文献からするかぎり、屈辱的な罵声を浴びてもなぜかベークマンは冷静であり、年下の者の過剰反応にあまり関心を払っていないようにみえる。かれは関係を修復するだけの余裕さえもっていたのである。

書簡7・8について客観的な総合評価を下すことは難しい。問題はデカルト＝ベークマン相互の影響関係にまで関わるからである。歴史的な観点を見ておくと、17世紀当時の解釈として、まずライブニッツは次のように言っている。「1630.デカルト氏の書簡の点だけからイサック・ベークマン氏を酷評するのは迷惑なことだと思う。そこから私は人の欠点を信用すべきではないことを学んだ。なぜなら、デカルト氏は誰かに反対して傷つけられると、ものごとを異様にしてしまうからである」²⁶。これはデカルトの逆上ぶりを批判し、ベークマンを公正に判断しようとしたものである。つぎに、ガッサンディはベークマンを「1629年私がオランダで出会った最高の哲学者」²⁷と評価している。周知のように、ガッサンディは『省察』への第五反論でデカルトと激しい論争をすることになる人である。逆にバイエはデカルトに好意的である。「ベークマンはかれより30歳ばかり年長²⁸であったが、彼の名声が公衆の間で高まっていくのを目にあたりにして、自分にも学のあることをひけらかしてたまらなくなり、自分がかつて彼の先生だったのだと人に信じさせ

ようとした(もっとも、ベークマンがデカルトに教えたという自慢していることは、実はベークマン自身のほうが彼から学んだことなのであった)。そこで彼はこの点において、ベークマンに反省させるべくいろいろ必要な忠告をした。そして、代数学、屈折光学、幾何学に関し自分がかつてベークマンに与えたものはそのまま先方に委ねておいてもいいと思ったが、少なくともその虚栄心にくらかの歯止めをかけるために、この10年来ベークマンに預けたままになっていた『音楽論』の原稿を返却させた²⁹。このバイエの見方は、現代でも標準的な解釈となっていると思われる。たとえばロディス＝レヴィスは、「この人物〔ベークマン〕はたしかにデカルトほどの才能に恵まれてはいなかったが、はば広い好奇心をもち、しかも弟分〔デカルト〕の研究を評価していただけない、ますますみずからを称える気持ちになった。かれらが出会わなければ、デカルトは無為で失望した軍人であることを、いつやめていただろうか」³⁰と総括している。

最後に筆者なりの評価を加えておく。この発端はメルセンヌの不用意なことば使い(「伝えた」、「教えた」)に発する可能性があり³¹、それを直線的に受けとめたデカルトにも誤解があったかも知れない。しかし、ちょっとした行き違いだけで関係が毀れるのは、信頼が厚くない証拠である。メルセンヌが介在しなかったとしても二人の学問観やころざしの相違は早晩明らかになったことだろう。心の底にあったベークマンへの不信は、これを機会に増幅されて憎悪となり、歯に衣着せぬことばになって表にあらわれている。すなわち、ベークマンの研究をミミズやウジ虫、小石やガラスの破片、その『数学＝自然学』はおとぎ話の夢想、病気などと罵倒し、果てはかれの出身地や教育程度まで小馬鹿にしている。いくら文飾を施しても、これではベークマンを怒らせただろう。かつての恩人に向ってこれだけの罵詈雑言を浴びせたなら、昔なら決闘、現代なら名誉棄損となる。やはりこれは若者の忘恩であり、言いすぎであり、それこそ病気³²かと思われるほどである。公平に見て、デカルトはベークマンから数学を自然学に応用することなど多くを「学んだ」ことは事実である。ベークマンに自分の業績を自負する行き過ぎがあったとするなら、デカルトにも先学に対して目にあまる言いすぎがあったと言わねばならないだろう。

書簡7. デカルトからベークマンへ

アムステルダム1630.9/10 (AT. I ,154-156)

拝啓.

最近くださったお手紙³³に返事をするのをためらっておりまして。というのも、あなたにとってたいへん好都合と思われるような材料は私には何もなかったからです。しかし、今やあなたの院長補佐³⁴のお勧めもありますので、私の意見を自由に打ち明けるようにいたしましょう。なぜなら、あなたが真理を愛し、誠実であるならば、私が黙っているよりも自由に話すことの方が、あなたにとってより好都合であるからです。

昨年、私の『音楽論』³⁵をあなたから取り戻しましたが、それは私がそれを必要としているからではなく、あなたがそれについてあなたも私があなたから学んだかのように話していると聞いたからです³⁶。しかし、そのことをあなたにすぐに書こうとは思いませんでした。単なる他人の報告だけから、私が友人の誠実さに疑いを深くしたように見られたくないためです。しかし、今や、多くの他のことを通して、あなたは友情と真理よりも空しい虚栄の方をお好みだと確認されますので、手短にご忠告いたします。もしあなたがあることを他人に教えたと言うなら、あなたが本当のことを語っている場合でもそれは厭わしいことですが、しかしそれが嘘であるならもっと厭わしいことです。そして、あなたがそのこと自体をその人から学んだのなら、これ以上に厭わしいことはありません。

しかし、おそらくあなたはフランス語の丁寧な言い方に惑わされたのでしょう。会話や手紙を通して私はあなたから多くを学び、あなたの観察からさらに多くの援助を期待しているとしばしば証言しましたので、私自身が以前主張したことをあなたもまた確認したとしても、私になら侮辱を与えていないとお考えだったことでしょうか。私個人に関するかぎり、それはほとんどどうでもよいことですが、しかし、古い友情のためにあなたにご忠告したいと思います。あなたが、私を知っている人たちの前でこのように何かを自慢する³⁷とき、それはあなたの名声を著しく損なうということです。なぜなら、かれらはあなたが言うことを信用せず、むしろあなたの虚栄をあざ笑うからです。あなたが私の手紙をもっていることからその証拠が示される、というわけではありません。なぜなら、かれらは私がアリやウジ虫からさえも教わる³⁸のを常としていてを知っており、私があなたから何かを学んだとするならこれと同じ仕方であると思うからです。も

しあなたがそのことを、そうすべきように、よい意味に受けとめるなら、私は過去のことは誤りと呼んでも罪とは呼ばないでしょう。それは、以前のように私があなたに仕えるものであることを妨げるものではありません。

書簡7 bis. ベークマンからデカルトへ

1630.10前半 (Journal de Beeckman. IV ,195 ;

Descartes à Mersenne.1630.11.4. AT. I ,171.)

…あなたのメルセヌは、数日³⁹のすべてを私の自筆原稿本 [日記] に没頭し、そこでかれがあなた [デカルト] に属すると思っていた多くのものを見たとき、それに付された日付⁴⁰からその著者がだれであるかを正当に疑いました。私はかれに、あなたまたはかれを喜ばせるためにそうしたのだと、おそらく率直すぎるほどに説明しました。…

書簡8. デカルトからベークマンへ

アムステルダム1630.10.17 (AT. I ,156-170)

拝啓

メルセヌ神父があなたについてなにかを私に報告したのではないかと疑っておられるなら、あなたは事実からはるかに遠く、きわめて敬虔な人の人間性を悪く判断していることになります。しかし、他の多くのことを私が弁明する破目にならないためにあなたに知っておいていただきたいことは、あなたを非難すべきだと認識したのは、その人からでも他の人からでもなく、あなた自身が私に宛てた手紙⁴¹からであるということです。というのも、まる一年のあいだ双方とも沈黙したのち⁴²、最近になってあなたは、私 [デカルト] が研究のことを熟慮したいのならあなた [ベークマン] の下に復帰すること、そして他のどんなところでもあなたの下にあるほど有益ではありえないこと、その他の同様な多くのことを書きましたが、それはまるで弟子のだれかに友人として親しい調子で書いているように見えたからです。あなたがそのような手紙をしたためたのは、それを私に送る前に他の人に読ませ、私がしばしばあなたから教わることが常であったことを自慢するためである、ということ以外になにを私は心のうちに思い浮かべるべきだったでしょうか。実際、そこには悪意のある策略が隠されていると思われましたので、非難に値すると私は判断した次第です。

というのも、私が実際なにかをあなたからかつて学びあるいはいまも学ぶことができるのは、私が自然

におけるすべてのものから学ぶのが常であるのとは別の仕方である（つまり私の主張ではアリそのものやウジ虫から学ぶのが常であるのとは別の仕方である）と信じるほど、あなたは愚かで自分自身に盲目であることを私は少しも疑うことができなかつたからです。自分には不可能だとあなたが認めておられた研究に私が専念していたとき⁴³、私が以前に若い時の練習として放棄していた他のこと⁴⁴をあなたは聞きたいと熱望され、私にはどれほど迷惑だったかを覚えておられますか。あなたは援助するものとしてほど遠かつたように、今は感謝するものとしてもほど遠いのです。しかし、最近のあなたの手紙から、あなたが過ちを犯しているのは悪意のせいではなく病気⁴⁵のせいであることが私にははっきりと分かりました。それゆえ、これからはそれをとがめるよりも憐れむことにいたします。そして、私はそれを薬で治療できると思い、古い友情のゆえをもってここにご忠告いたします。

最初に、人が他人に教えることができるのはどういう種類のことがらであるかを考えてみてください。もちろん、言語、歴史、実験⁴⁶、そして明晰で明証的な論証で幾何学者のそれのように知性を納得させるものは、教えられることができます。しかし、哲学者の教義や意見は、そう語られていることからしてすぐに教えられものではありません。プラトンはあることを言い、アリストテレスやエピクロスは別のことを言っています。テレシオ、カンパネルラ、ブルーノ、バッソン⁴⁷、ヴァニーニ、すべての革新者もそれぞれ別のことを言います⁴⁸。私は自分のことではなく、だれであれ知恵の研究者のことを言っているのですが、かれらのうちのだれが教えるでしょうか。むしろ、その根拠あるいは少なくとも権威によって最初に説得する者です。しかし、もしだれかがいかなる根拠にも権威にも導かれることなくなにかを信じるなら、たとえそのこと自身を多くの人から聞いたとしても、しかしそこから学んだと思っはなりません。もちろん、人が真なる根拠によって信じるように導かれるがゆえに知ることはありえます。しかし、他の人たちは最初に同じことに気づいていたとしても、誤った原理から導き出したがゆえに知ったことにはなかつたでしょう。あなたがこのことに入念に注意するなら、私は「ベトラコムイオマキア」⁴⁹からなにも学ばなかつたように、あなたの「数学＝自然学」⁵⁰の夢想からなにも学ばなかつたことが容易に分かるでしょう。実際、あなたの権威が私を動かしたでしょうか、あるいはあなたの根拠が

私を説得したでしょうか。

しかし、私は[あなたが言った]いくつかのことを理解するや否や、信じ、承認したとあなたは言いました。それなら、私がすぐに信じたのはあなたから学んだからではなく、むしろ以前に同じことをすでに考えていたがゆえに承認したとお考えください。ただ、あなたが言ったことを私がしばしば承認したと認めているからといって、自分の病気に安住しないように願います。なぜなら、哲学についてうまく議論することがどんなにできない人でも、たまたま真理に一致する多くのことを言う場合があるのはまれではないからです。しかし、人は他人からなにも学ばなくても多くの同じことを知ることができます。そして、知識の所有において、あたかも土地や金銭の所有におけるように、自分のものと他人のものとをあなたのように正確に区別することはバカげています。あなたがあることを知っているなら、たとえそれを他人から学んだのであっても、それはまったくあなたのものです。しかし、他の人も同じくそれを知っているなら、それもまたかれらに属することをあなたが許さないのは、どういう権利によるのでしょうか。あるいは、むしろどういう病気のせいでしょうか。私はこれ以上あなたを憐れむことはいたしません。病気があなたを幸せにしましたし、あなたは、自分の国の港に陸づけする船はすべて自分のものだと思じたかの人⁵¹に劣らず、裕福だからです。失礼ながら言わせていただきますが、あなたはこの幸運を少し過度に傲慢に使っています。というのも、あなたはどれほど不当であるかをお考えください。あなただけが所有することを欲しているのです。そして、他の人たちが知っていてあなたからけって学ばなかつたことだけでなく、あなたがかれらから学んだと認めていることまでをも、かれらがわがものと主張するのを禁じているのです。

実際、私があなたに送った『代数学』⁵²はもはや私[デカルト]のものではない、とあなたは書きました。『音楽論』についてもあなたは別のときに同じことを書きました。私が思うに、これらは今あなたの手元にあるがゆえに、その知識は私の記憶から消し去られたとでも言いたいのですか。実際、なぜあなたはその原本を要求するのですか（あなたの手元にはその写しがありますが、わたしはそれを持っていないのです）。私は、今はそれに留意していないその内容を時の経過とともに忘れることがありえるので、あなただけがその所有者になるとも言うのですか。しかし、おそらくあな

たはそれを戯れに書いたのでしょう。なぜなら、あなたがどれほど洗練され、機知に富むかを私は知っていたからです。しかし、あなたは、自分がその最初の発見者でなければ、あるものが自分に属するとは本当は思われたくないのです。それゆえ、あなたは自筆原本〔日記〕に、なんであれ考えたことの日付を添えたのです。おそらくだれかが、あなたよりもひと晩あとに夢で見たものを、厚かましくもわがものと欲することのないようにするためです。しかし、実際のところ、あなたは自分のものに十分慎重に気をつけているとは思われません。というのも、その原本の信憑性が疑われたならどうしますか。証人をつけたり、公の登録簿で承認したりする方がより安全ではありませんか。しかし、本当を言いますと、たしかにその裕福さは盗人の心配があり、注意して見張っていなければならないので、あなたを幸福にするよりもむしろ不幸にします。あなたが私を信じてくださるなら、病氣と同時に不幸から逃れることをあなたは後悔しないでしょう。

ねがわくは、全人生を通じてあなたが本当の称賛に値するなにかを発見したかどうかを、自分でお考えくださることを。発見には三種類あることを私はあなたにお示しします。第一に、あなたがなにか重要な発見をなし、理性によって導かれた精神の力だけでそれを考え出すことができたのなら、あなたは称賛に値すると私は認めます。しかし、だからといって盗人を恐れることはありません。水は同じ水ではあっても、その源泉から飲むときには水がめあるいは小川から飲むときは常に違った味がします。なんであれ、それが生まれた場所から他の場所へと移されるとよくなることもあります。多くの場合だめになります。そして、生来のしるしをまったく留めないで、それが他所から移されたことが容易に分かるほどです。あなたは多くのことを私から学んだと書きました。しかしそれは違います。なぜなら、私を知っていることはごくわずかであり、多くではないからです。しかし、なんであれあなたがお持ちのものを使い、わがものとされることを私は許します。私はそれを登録簿に記載しませんでしたし、発見した時間を添えませんでした。しかし、もしいつか私の知性の領地がどんなものかを人に知られたいと思うなら、その果実は他の領地からではなく私の領地から摘み取られたことが容易に知られるであろうことを私は疑いません。

もう一つの種類の発見とは、知性からではなく幸運から来るものです。そして、それは盗人から安全であ

るよう見張っていなければならないことを私は認めます。なぜなら、あなたがそれを偶然見つけたなら、他の人もあなたからそれを偶然聞きつけ、あなたと同じ権利をもってそれを所有し、あなたに劣らずそれをわがものとするができるからです。しかし、私はそうした発見が本当の称賛に値すべきものではないと思います。しかしながら、大衆は無知であるので、幸運の恵みにおいてなにか優れている人たちを称賛します。そして、その女神はまったくそれに値しないものに施しをするほどまでに盲目ではないと信じています。かりにあなたにはからずも施しがなされ、少しばかりより優れるようになったとしても、私はけっしてあなたが称賛に値するとは判断しないでしょう。むしろ「少しばかりより優れている」だけなのです。なぜなら、もしある人が、乞食が若干のわずかの金銭を戸口をたずねながら集めたことで大きな名誉が与えられるはずだと考えるなら、すべての人から笑いものにされるだろうからです。むしろお願いしたいのは、あなたの原本をご覧になり、注意深くひもとき、すべてを数えあげていただきたいのです。そうすれば、私がまったく間違っているか、あるいはあなたのもののうちには、その表紙以上により貴重なものはなにもないかの、どちらかでしょう。

第三の種類の発見は、その価値がまったくないかあるいは非常に少ない場合でも、しかしそれを発見した人たちから立派なものであるかのように思われているものです。それはなんらかの称賛にはほど遠いので、そのもち主がそれを大いに評価し、注意深く監視すればするほど、それだけ多く他の人の嘲笑あるいは憐れみにさらされます。あなたの眼前にある盲人を想定してみてください。かれは食欲のあまり気が狂い、終日、隣の館のゴミのなかに宝石を探し、なにか小石かガラスの破片を手にするたびごと、すぐにそれが大そう貴重な宝石だと思いこむのです。最後にはそうしたものを沢山発見し、それで小箱を満たしたあとで、その箱を見せて自分はたいそう富んでいると自慢し、他の箱を無視するのです。最初、あなたはかれが快い種類の狂気に触れていると言うはずですが、しかし、かれが小箱を覗き込み、盗人を恐れ、使うことができないかれの財宝が失われるのではないかとあわれにも苦しんでいるのを見るなら、あなたはかれを嘲笑するのをやめ、憐れむに値すると判断するのではないのでしょうか。しかし、私はあなたの自筆原本をその小箱に比べたいものではありません。むしろ、そこには小石やガラスの破

片より以上に堅固たりえるなにかがあるとはほとんど思われないうのです。

というのは、あなたがとくに誇示していること、すなわち弦の振動と放物線とがいかに重要であるかをわれわれは知っています。それ以上のものを私は知らなかったからです。第一に、弦の振動については、もしあなたが、あなたの生徒たちに初歩よりも少し高度なことを教えたとしても、あなたはそのこと自身（すなわち音は弦あるいは空気を打つ他の物体が反復して振動することから生じること）をアリストテレスにおいて見出したことでしょう。あなたはそれを自分のものと呼んでいるのですが、あなたは私がそれを称賛をもってあなたに帰属させないことを嘆いています。あなたの考えを取り戻すべく、アリストテレスは盗人であると言って法廷に呼び出してごらん下さい。しかし私はなにをしたのでしょうか。私は音楽について書きました。あることがらは正確な音の認識には依存しないと私が説明したとき、音は多くの振動で耳を打つと言われるにせよ、あるいはその他であるにせよ、それは同じ仕方で見られることができる、と私は付け加えました。私は私に帰属していなかったものを盗んだのでしょうか。私が本当であると認めなかったものを称賛すべきなののでしょうか。あなたを除くすべての学校の教師がアリストテレスから学んだものを、あなたに帰すべきなののでしょうか。私の無知は、すべての人が笑うに値するのでしょうか。

しかし、あなたは私に双曲線を教えたことで大きな称賛に値するとも言えるのでしょうか。あなたは双曲線がなんであるかをおそらく文法学者のようにしか理解していなかったのです。私はあなたの病気に同情していなければ、笑いを抑えることができませんでした。双曲線の本性のうちのあるものは光線を屈折させることであると私は申しましたが、その証明は私の記憶から消えており、ごく簡単なことにおいてしばしばそうであるように、すぐには心に浮かんでは来ませんでした。むしろ、私はその反対のことを楕円においてあなたに証明しました。そして、少なからぬ命題は、あまり注意されなくても、楕円からだれにも見逃されなほどきわめて容易に導き出されうることを説明しました。それゆえ、私はあなたに、それを探究することで精神を鍛錬するようにすすめました。あなたは円錐曲線についてはまったくなにも知らないと思っていたので、私はそれをきめて容易であると判断していなかったならば、私はたしかにすすめなかったでしょう。

しかし、あなたはそれを探究し、発見し、私に示しました。私はよろこび、そのことについていつか書くことがあるならその証明を使うであろうと申しました。私が師としてのあなたに名誉と尊敬とを十分に示さなかったとあなたが批難するとき、いったい正気なのかどうか私に言ってください。

もしあなたが、まだ詩をまったく作つたことがないあなたの生徒の一人に、いくつかの風刺詩の作り方を教え、一つあるいは他の詩句の位置を変えるだけですべての詩を調和させる仕方を指示して、かれが首尾よく語句の位置を変えたならあなたはそのことを喜びませんか。おそらくあなたは、その生徒の詩作を促すために、いつか同じことがらについて風刺詩を書こうと思うなら他人の詩を使つてはいけな、と付け加えさせませんか。しかし、これらわずかの称賛によってかれが励まされ、自らを大詩人だと思ふほどになるなら、あなたはそれを子供じみたこととして笑いますか。しかしそのあげく、かれが、それゆえにあなたからねたまれていると思ひ、自らをあなたの師と呼んで、真顔で「師にとって…などは恥である」⁵³（この…に他の意味が隠されているとは私は理解していません）と言うのであれば、あなたは、かれがただ子供のような単純さから思い違いをしているだけでなく、なにが混乱した精神をもっていると正当に判断しないでしょうか。しかし、あなたにぴったりと合うこの例によく注意するならば、あなたを悩ましている胆汁をとり除くための最も効果的な救治法をあなたは知るでしょう。

しかし、これまで私はあなたの病気の原因を除去することに努めてきましたので、次には苦痛を和らげることに取りかかります。あなたはとくに、自分ときとして[人を]称賛しているのに人から称賛されないという点を嘆いています。しかし、ご存知のように、あなたが私を称賛したのは友人としてではありませんでした。私はあなたが称賛などしないよう、そして私についてなにも語らないよう、たびたびお願いしたはずで、私がこれまで過ごした全人生が、そうした称賛を實際に退けていることを十分に示しているはずで、それは私が「感じやすいたち」ではないからではなく、人生の静謐と清らかな閑暇の方が名誉よりもはるかによいものだと思うからです。人間の習慣としてその両方[名誉と静謐]を同時に持つことができるということには、私はほとんど納得がいきません。しかし、あなたの手紙は私を称賛する理由をあなたがお持ちであることを明らかに示しています。なぜなら、私

を称賛したあとで、あなたは私の推測よりもあなたの『数学的自然学』を好むのが常であると書き、しかもそれをわれわれの友人たちに公表しているからです。そこで私をほめそやし、その比較からしてあなたがより大きな名誉を求めること以外に、あなたはいったい何をお望みなのでしょうか。つまり、腰掛けをより高いところに置き、それを踏みつぶしてあなたの虚栄の高座をより高めようとするわけです。私はあなたの病気をやさしく扱うでしょうし、荒唐治も用いません。実際、もし私がそうしたいなら、そしてあなたはそれに値しますが、あなたを汚名でいっぱいにすることができます。私はあなたを健康にするもむしろ、リュカンベスの縄⁵⁴に誘いこむのではないかとおそれます。それゆえ、私はあなたに以下のことをご忠告することで満足しましょう。すなわち、もしあなたが称賛をお求めならば称賛されるべきことをするよう（そうすれば敵は不本意ながらも認めざるをえないでしょう）。しかし、あなた自身の証言からも偽りの友人のそれからも、けっして称賛を期待しないよう。そしてあなたもまだ知らないものを他人に教えたと自慢することをせず、あなたを他人の上に置くことのないよう。

その例を出すことに私自身恥ずかしく思いますが、しかし、あなたはきわめてしばしば私とあなたを比較するので、やむをえないと思われまます。私がなんでもあれなにかを他人に教えたのを自慢したことを、あなたはかつて耳にしましたか。私はかつて自分をだれかに優先させたかと言っているのではなく、むしろだれかと比較したかと言っているのです。私がある意味で天使と同等になっているというあなたの非難については、あなたの精神はそれを信じるほど狂っているとは私はまだ思いません。なぜなら、私はあなたの病気の力が絶大でありうることを認識しておりますので、なにがあなたにそうしたことを確信させる機会を与えたのかを説明することにします。哲学者や神学者の習慣として、あることが起こるのは理性に反していることを示そうと欲するたびごとに、それは神によってもなしえなかったと言います。私の知性の理解力からして、その言い方は少し不謹慎に過ぎるように思われることを私は否定しません。それゆえに私はもっと穏健な言い方をし、もし同じようなことが私に起こるなら（それは哲学においてよりも数学においてよりしばしば起こりえますが）、他の人が神にはなしえないと言うところを、私は天使にはなしえないのみ言うでしょう⁵⁵。それゆえ、私が天使と同等であるのなら、同じ理由に

よって世界で最高の賢者は神と同等であると言わねばなりません。もし私が、とりわけ謙遜を愛したというまさにそのことが虚栄だとの疑いから逃れることができなかったならば、私はまったく不幸でしょう。

その他、もっと多くのことを私は書くことができるでしょうが、以上のことが役に立たないなら、多くのことも役に立たなかったことでしょう。今や私は、われわれの友情を十分に満足させたと思っています。もちろん、私がこの手紙を書いたのはなんらかの怒りやあなたに対する悪意からではなく真の友情からであることを、真面目に信じてくださるよう。というのも、第一になぜ私はあなたに腹を立てなければならないのでしょうか。あなたが私よりも優れているからでしょうか。自らを最下位に置くのを常とする私が、あたかもそれを気にしているかのようではないでしょうか。しかし、かりに私がそれを極度に気にかけたとしても、それは、あなた自身が私よりも優れているのではなく、他の人があなたよりも優れているのではないかと危惧してのことです。また、われわれの間にそれに関して論争がありえるなら、そのこと自身「あなたが優れていること」があなたの口から言われることを私は喜ぶでしょう。他人はそれを信じるのがそれだけ少ないでしょうから。また、私はあなたに対して悪感情をもっているわけでもありません。それは、私が知っている最も有効なことをあなた宛てに書き送っていることから十分に明らかです。つまり、自分の誤りが率直に知らされることよりも有効なことはないからです。

そして、われわれはときどき論敵からも忠告を受けることがあるにせよ、しかし良識のなんらかの欠片があなたにまだ残っているかぎりには、かれらの忠告と私のそれとの間に大きな相違があることをあなたは容易に知るでしょう。論敵たちはただかれらが批難している人を不快にしようと努めるだけです。私は穏やかな批判によってあなたに健康を回復させるのです。また、かれらは、悪口を言うことがそう言われている当の人の利益になることが予想されるなら、それをやめますが、私の場合はそれがあなたの利益になることを願いかつ望むのです。私がかくも長い手紙を書く労を取ろうと企てた理由はこのほかにありません。最後に、かれらは他人の欠点を当事者に劣らず他人にも聞いてほしいがために罵りますが、私の場合はあなただけにあなたの欠点を明らかにしているのです。そして、あなたがそれだけより容易に健康を回復できるよ

うに、私にできるかぎりこれまでそれを他の人たちの前から隠しましたし、将来においてもつねに隠すでしょう。もっとも、そのなんらかの望みが残されているかぎりのことです。

というのも、もしあなたが病気であり続けるなら、私があんな心をした人間とあるとき友情を結び、友人を選ぶのにほとんど判断を用いなかったという非難がおそらく向けられるからです。私はあなたと関係を絶ってみんなの前で弁明するよう強いられ、どういっわけで私があなたとかつて友人関係に入ったかの話をするようになるでしょう。それは選択ではなく偶然によってであり、軍の駐屯地であってラテン語で話ができるのはあなた一人しかいない状況⁵⁶においてであった、と私は語るようになるでしょう。そして私は次のようにも言うでしょう。しかし、そのとき病気はそう重くはなく、またあなたがごこの出身⁵⁷でどういう教育を受けたかも知っていたので、私にはあなたが病気であるという認識がありませんでした。そして、私の目の前に表れてくるあなたの過失はなんであれ、病気よりもむしろ粗野と無器用さに帰していました。と。そして、それを知ったあとで私がどういう仕方、最も健康によい治療法によってあなたを病気から脱せしめるかに努めたかを、最後に付け加えたことでしょう。ところで、私はあなたが健康になる方を断然選びます。あなたがもしそちらを選ぶなら、私があなたの友人であることを恥じることはなく、あなたがこの手紙を受け取ったことを後悔することもないでしょう。さようなら。

書簡9. デカルトからベークマンへ

アムステルダム1634.8.22 (AT.I,307-312)

われわれの間で最近生じた論争⁵⁸を、今もあなたが覚えていてくれていることを私は喜びとしています。しかし、そのとき私が用いた論拠にあなたはまだ満足していなかったと思われまので、あなたの答弁について私が考えていることを自由に書くことにいたします。そして、その論題そのものについて疑問がないよう、私はまずここで手短かにことがら全体の話をしておきます。

最近私は、われわれが一緒であったときあなたが書いていたように、光はけって瞬間的に運動するのではなく、むしろ(同じことだとあなたは解するでしょうが)光っている物体から瞬間的に眼に到達する、と言いました。このことは私にはきわめて確かであった

ので、それが誤りであると証明されうるなら、私は哲学においてまったくなにも知らないと告白する用意があるほどだ、とも付言しておきました。

これに反してあなたは、光は時間的にでなければ運動しえないと主張し、われわれのうちのどちらが誤っているのかがそこから明らかになる実験の仕方を考案した、と付言しました。その実験は(音、木槌その他類似のものなど余計なものがいくつか取り除かれて)現在あなたの手紙においてははかによく提示されていますが、それは、もしだれかが夜、松明を手を持って動かし、自分から1/4里離れた鏡を見るなら、手のその運動の方が鏡を通して見られる同じ運動よりも、先に感覚されるかどうかを知ることができるだろう、というものです。

しかしあなたはその実験に自信たっぷりでしたので、もし鏡を通して見られたその運動の瞬間と、手で感じられた運動の瞬間との間には知覚されるいかなる間隔もないなら、あなたは自分の全哲学が誤りと思うだろうと告白するほどでした。反対に私は、もしそうした間隔が感覚によって知覚されるなら、私の全哲学は基礎から転覆するだろうと言いました。その結果注意すべきことは、われわれの間の論戦は光の伝播が瞬間的か時間的かという問題よりはむしろ、実験の成否です。しかしその次の日に、私はすべての論争を終わらせ、あなたを無益な労から解放するために、われわれにはもう一つの実験があることをお知らせしました。その実験は、すでにしばしばおびただしい数の、しかも最も入念で注意深い人によって検証されており、そこから、光るものから光りが発出する瞬間と、それが眼に入る瞬間との間には、そうした間隔はまったくなく、まぎれもなく明らかになったのです。

このことを説明するために、私はまず、月は太陽に照らされるとお考えかどうか、そして食が起こるのは、地球が太陽と月との間に介入するかあるいは月が太陽と地球の間に介入することによるとお考えかどうかをたずねました。あなたはそれに賛成しました。つぎに私は、光が天体からわれわれにどのような仕方、到達すると想定したいのかをたずねました。あなたは直線によってだと答えました。すると、太陽を見ているとき太陽が現れているのはそれが実際にある位置においてではなく、それによって太陽が見えている光が、太陽から最初に発出する瞬間に太陽があった位置においてであることとなります。最後に私は、松明が動かされる瞬間と、その運動が1/4里離れた鏡に現れる瞬間と

地球Bに至るまでに半時間を要すると仮定します。しかし、月よりも少なくとも24倍遠い太陽Aからは、12時間を要します。それゆえ、あなたの最後の承認によれば、太陽はAにあるその瞬間においてBにある眼から見えますが、その間に月がCにあっても、月が間に入って邪魔をすることはありません。月が固有の光をもっていたなら、そこでもまた月は見られます。なぜなら、太陽は12時間前に太陽から発出した光のおかげで、半時間前に月の空を通過してそこ[A]に見えるからです。月によって光が邪魔されることはありませんでした。なぜなら、そのとき月はまだ太陽と地球との間にはなかったからです。しかし、いま月によって邪魔されている光は、半時間後でなければBに達することができません。その結果、光の衰弱つまり食は太陽・月・地球が同じ直線上にある瞬間の半時間後でなければ見ることができないこととなります。しかしながら、それとは正反対のことが、すべての天文学者の実験によって確立されています。つまり、太陽・月・地球が同一直線上にあるそのときに食が起こるのであり、そのとき実際、半時間の誤りだけではなく半分[30秒]の誤りでも必ず知覚されます。それゆえ、など。

私はその他の無数のことは付け加えません。そうすれば後の方のこの設定は前のものよりもはるかに不合理であることが示されるでしょう。たとえば、そう設定されるなら、われわれはいつも東方に地球と天の間の地平線に黒い円を見るにちがいない、そして西方に山々の下に太陽と星を見るにちがいない、など同様のことです。また私は、他のさまざまな天体から来る光のこの円運動が、光を発出する天体の速さがつねに不均等さを維持するように規制されているのは、どういう力によるのかもおたずねしません。というのも、いま私が書いたことにあなたが納得しないとするなら、あなたはまったく論破しがたいと私は告白することになるからです。さようなら。

アムステルダム、1634年8月22日

注

- ¹ 前稿(上)で触れることができなかつたこの断片を、新たにテキスト(書簡7bis)とした。
- ² 前稿では「ドルトレヒト大学学長」と書いたが、これは大学ではなくギムナジウム(フランスのコレージュ)であるので、このように訂正する。デカルトも「あなたの生徒」(書簡8)という言い方をして

いる。

- ³ 『メルセンヌ書簡集』(*Correspondance du P. Marin Mersenne : religieux minime, publiée par M^{me} Paul Tannery, éditée et annotée par Cornélis de Waard, avec la collaboration de René Pintard, tome. II . Paris.1945*)には、1629-30年の往復書簡の5つが収められている。話題は音楽論が中心である。
- ⁴ 『数学=自然学に関する省察・問題・解答の集成』*Mathematico-Physicarum Meditationum, Quaestionum, Solutionum Centuria*. Utrecht,1644
- ⁵ 古典的な説としては、G.コアン, A.アダン, G.ロディス=レヴィスの説がある。すなわち、1628年10~12月から1629年7~9月の9ヶ月間、デカルトはフラネケルで形而上学に集中し、『形而上学の小論文』を書きはじめたというものである。しかし、冬ごもりするためにあえて寒くて不便な村に行くことはありえても、図書館の利用が可能となる大学への登録が4月とはいかにも遅すぎ、不自然の感が残る。これに対して、H.グイエは1629年3-12月としている。
- ⁶ K. van Berkel, Descartes' debt to Beeckman, in S. Gaukroger, J. Schuster and J. Sutton ed., *Descartes' Natural Philosophy*. London, 2000. p.51.
- ⁷ A. Baillet, *La vie de Monsieur Descartes*. Paris. 1691. I ,p.169
- ⁸ その根拠はホイヘンス宛てのレネリ書簡1629.3.28(AT. X ,541-543)である。それはデカルトが1629年3月末にアムステルダムにいたことを思わせる。
- ⁹ フラネケルを選ぶに際しては、上述のリヴェの助力があった(G.Rodis-Lewis, *Descartes. Biographie*. Paris. 1995, 飯塚勝久訳『デカルト伝』未來社1998.p.133)。
- ¹⁰ この年表の作成に当って参照した主たる文献は以下の通り。K. van Berkel, *Op. cit.*, 上記『デカルト伝』, 上記『メルセンヌ書簡集』, C. de Waard ed, *Journal de Beeckman*. III & IV. Amsterdam/The Hague. 1953(=本稿ではインターネット版 Digital Library. History of Science and Scholarship in The Netherlands を使用した)。
- ¹¹ AT版はこの書簡の日付を1629年8月としているが(AT, I ,30), 『メルセンヌ書簡集』にしたがってこのように読む。
- ¹² K. van Berkel, *Op. cit.* p.52.
- ¹³ バイエも「ベークマンは自分がその著者とみなされることを疑うことができなかつた」としている

- (A.Baillet, *Op. cit.* I ,p.205).
- ¹⁴ これを証明する資料をファン・ベルケルはあげていない。
- ¹⁵ バイエはこの補佐が仲介したと解釈している (A. Baillet, *Op. cit.* p.211).
- ¹⁶ G. ロデイス＝レヴィス『デカルト伝』p.148
- ¹⁷ *Dialogo sopra i due massimi sistemi del mondo Tolemaico e Copernicano*. Fiorenza.1632 (『プトレマイオスとコペルニクスとの二大世界体系についての対話』=いわゆる『天文対話』)。この書は宗教裁判所によって断罪されていたが、ヨーロッパ知識人の間で広く読まれていたようである。岩波文庫版で本文が650ページほどあり、イタリア語原文を30時間で読むのには苦労したはずである。ベークマンは数学者ホルテンシウスからそれを借用し、読書ノートを残している。後者はメルセンヌを介してそれを手に入れたが、おそらく直接ガリレイからも送られていたはずだと考証されている (*Journal de Beekman*. III ,356).
- ¹⁸ K. van Berkel, *Op. cit.* p. 53
- ¹⁹ G. ロデイス＝レヴィス『デカルト伝』p.148.
- ²⁰ 精神分析でいう「投射」の好例である、父親であるベークマンを批判してはじめて自我の独立を得る、などの見方がある (K. van Berkel, *Op. cit.* p. 55)。石井は、私有財産を求める空虚な私と、永遠の秩序に与る慎ましい私との「二つの私の不和」という独自の見方をしている (石井忠厚『哲学者の誕生ーデカルト初期思想の研究』東海大学出版会1992,p.295)。
- ²¹ K. van Berkel, *Op. cit.* p.55-57 (問題の絞り方についてもこの論文から教わった)。
- ²² 『情念論』には「誇り」*gloire* についての記述がいくつもあるが、それは「名誉欲」であってこの場合の参考にならない。
- ²³ しかし前稿 (p.39) で指摘したように、デカルトはパスカルと真空実験の優先について争うことになる。
- ²⁴ 音楽は数学の一種であるので、哲学と違って教えることができる学問に分類されるはずである (AT. I ,158)。
- ²⁵ A.Baillet, *Op. cit.* I.p.211
- ²⁶ *Remarques sur l'abrégé de la vie de Mons. des Cartes*, in C.I.Gerhardt ed, *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Hildesheim.1965. IV ,316
- ²⁷ P.Gassendi, *Lettres de Peiresc*. IV ,201.AT. I ,169
- ²⁸ 実際は8歳年長であった。
- ²⁹ A. Baillet, *Vie de Monsieur Descartes*. Paris. 1692. p.85, 井沢義雄・井上庄七訳『デカルト伝』講談社1979.pp.81-82
- ³⁰ 『デカルト伝』pp.149-150
- ³¹ ロデイス＝レヴィスは「メルセンヌは状況を悪化させるつもりはなかったはずだが、若干の不手際があった…」(『デカルト伝』p.145)としている。*communicavi*「私は伝えた、分け与えた」という元のことばが、*docui*「私は教えた」という意味に理解された点に誤りがあったと思われる。
- ³² のちに和解したあとも、またベークマンが死んだあとでさえも、デカルトの怒りはずっと収まらない。そこには病的な偏執さえ感じられる。
- ³³ この書簡は失われている。
- ³⁴ ドルトレヒト学院院長であったベークマンは、補佐のヴァン・エルデレンに手紙を代筆させていた。
- ³⁵ 1619年ベークマンに献呈された『音楽提要』。メルセンヌ宛1629.12.18.AT. I ,100
- ³⁶ 「10年前にかれ [ベークマン] が私の師であったと書いていたとするなら、かれはあなた [メルセンヌ] が自分をなおさら高く評価するだろうと思っていたのです」(メルセンヌ宛1629.10.8.AT. I ,24)。
- ³⁷ デカルトの批判は、もっぱら教えたと「自慢する」その態度に向けられている (石井忠厚『哲学者の誕生』p.293)。それが、虚栄、厭わしい、アリやウジ虫という言葉になっている。
- ³⁸ このフレーズは次の書簡8でも繰り返される。
- ³⁹ 1630年8月にメルセンヌがベークマンを訪問したことを指している。
- ⁴⁰ ベークマンの『日記』には、当然ながらその文章が記された日付が入っている場合が多い。デカルトの『音楽提要』に基づく記述と思っていたものが、その日付からして実はベークマンのものであることを知ってメルセンヌは驚いた、とベークマンは言いたのであろう。デカルトは書簡8で、ベークマンが几帳面に日付をつけていることを揶揄している。
- ⁴¹ このデカルト宛てのベークマンの手紙 (原文では複数形) は失われている。そのごく一部が、書簡7 bis として残されていることは既に述べた。
- ⁴² ベークマンへの不信を表明した1629年10月8日以降の一年間は、おそらく手紙のやり取りがなかったであろう。
- ⁴³ 1629年春のことである。
- ⁴⁴ 具体的に何を指すかは不明だが、おそらく音楽に関

することであろう。

⁴⁵ デカルトは首尾一貫して「病気」と解釈している。G. コアンはそれを「狂気」と踏み込んで訳している (G. Cohen, *Ecrivains français en Hollande dans la première moitié du XVII^e siècle*. Paris.1920.Genève. 1976.p.455).

⁴⁶ 「実験的諸学問」 sciences expérimentales という言い方が『良識論』(AT. X ,202) でなされている。その原理はすべての人に確実であるわけではないが、実験や観察によって検証される学問という意味である。医学はその代表である。『方法序説』では医学や機械学の実験 expérience についてしばしば述べられる (AT. VI ,50,63,).

⁴⁷ Sébastien Basson はフランス16-17世紀の自然哲学者。1621年アリストテレスの自然哲学を批判した書を出したことで知られる。ベークマンと同じく、物質が微細な分子 molécule から構成されるとする粒子説をとっていた。

⁴⁸ 古代および「現代」の哲学者が列挙されている (中世の思想家は除外されている)。プラトンを除いて、そのどれにもデカルトは否定的であった。

⁴⁹ Batrachomyomachia カエルとネズミの戦争の物語。仏訳は「すなわちコウノトリの物語」を付加している。ホメロス『イリアッド』からのパロディ。オランダの小学1年生の読みものであったという。

⁵⁰ 注4を見よ。

⁵¹ 風変わりな狂人トラシュロスが「ペイライエウスの港に入ってくる船はすべて自分のものだと思ひこんで、帳面につけたり、見送ったり、無事に帰港してくる船に大喜びした」という故事。Claudius Aelianus, *Varia Historia*. IV ,25 (アイリアノス『ギリシア奇談集』岩波文庫 (pp.175-176) による。この出典は名古屋大学の金山弥平教授の御教示による。

⁵² デカルトはパリから『代数学』を送るとベークマンに約束し、実際そうしたようである。その原本は存在しないが、その内容は部分的にベークマンの『日記』(AT. X ,333-335) から推察できる。参照、佐々木力『デカルトの数学思想』東大出版会 2003.pp.187-196。

⁵³ クレルスリエ訳は「師にとって弟子から称賛されないことは恥である」としている。なお、turpe est laudari ab illaudatis 「褒められざる人々によって褒めらるるは恥なり」という格言がある。

⁵⁴ テーベの人リュカンベスは、詩人アルキロクスに娘

を与える約束をしながら履行しなかったために批判されて絶望し、娘と共に縄でみずから首をくくったという故事。

⁵⁵ 「神になしえないことはありえない」(アルノー宛 1648.7.29.AT. V ,224) という永遠真理創造説の片鱗が顔を出している。

⁵⁶ ブレダで二人が遭遇したことを言っている。

⁵⁷ 出身地のゼーランドは当時、氷海に浮かぶ未開の島…などと蔑称されていた (AT. I ,169-170)。

⁵⁸ 「光が一定の速度で伝播するという説を支持していたベークマンは、デカルトを [1634年8月13-14日に] 訪問した際、その点をめぐってかれと議論をした。そこで、デカルトはその問題をふたたび取り上げて…この手紙を書いている」(G. ロディス=レヴィス『デカルト伝』p.148)。

(付記)

本学の落合洋文教授には、原稿段階で本稿を精査され、表記の誤りや不整合をご指摘いただいた。深く謝する次第である。